

コ ラ ム

学術用語の乱れ

最近、日本語の乱れということが、いろいろなところによく話題となる。女性化粧品の広告などによく見られる、単に外国語を日本語の接続詞でつないだだけの何とも奇妙な意味不明の文章や、近頃の若者たちの間で好んで用いられている新造語や流行語（ナウイ、ダサイ etc.）などがその対象となつているようだ。しかし私は一向にそれらを気にしないことにしている。というのは、これはまさに病的な一過現象で、このような言葉が遠い将来にまで日本語として定着するはずはないと信じるからである。

ところで、この日本語の乱れが、最近我々の学術用語に見られるようになってきた。まったく辞書にも収録されていないような新造語が、突如として講演発表や報文に現れるようになり、驚いているのはただ私ばかりであろうか。“気酸”、“固酸”などがまさにその好例で、前者は“気体酸素”を、後者は“固体酸化鉄”を意味するらしい。当事者たちは、最近の“省エネルギー”、“省資源”などの“省”ブームで“省語”と洒落こんでいるのかも知れないが、これなどは明らかに日本語の誤つた用法で、言葉の混乱をもたらす以外の何ものでもない。しかも先ほどの若者たちの新造語と違って、これが研究会や講演会などで堂々と用いられたり、あるいは印刷物になつたりして乱用の兆が見えて

くると、国語学者ではない私でも、のんびりとはしていられなくなる。

このような新造語ではないが、最近もう一つ気にかかる学術用語がある。“酸素ポテンシャル”がそれである。もともと、これは $2m/n$ モルの金属元素 M と 1 モルの気体酸素 O_2 から $2/n$ モルの金属酸化物 M_mO_n を生成する場合の標準生成自由エネルギー ($\Delta G^\circ = RT \ln P_{O_2}$) として定義されたものであるにもかかわらず、この“酸素ポテンシャル”を単に酸素の分圧や平衡圧を意味するものとして誤つて用いている研究者や技術者がこのところ目立つて増えてきている。それも日本人の間のみでなく、最近では外国の学術誌などにも時々見られるのは、この辺のところが外国では一体どのように理解されているのであろうか。圧力が強度因子でありまた酸素ポテンシャルが圧力の関数であることから、圧力をポテンシャルと表現してもよいと反論する人もあるようだが、しかしこの場合、圧力はあくまでも圧力であつて、酸素ポテンシャルという表現を用いることは誤りとすべきであろう。

このような学術用語の誤用については、このほかにもまだ例があろう。私は化粧品の広告や若者たちの日本語の乱れにはあまり気にしなくても、このような学術用語の乱れについては神経質でありたいと思つている。
(大阪大学工学部 森田善一郎)

編集後記

▶例年のごとく東京大学で開かれた春の学術講演大会は盛況のうちに終了し、鉄鋼研究の充実と、関心の高まりを示しました。

本誌も、新しい現象の発見や論理の発明を会員相互に発表し合う手段として、重要な役割を果たしてきております。

しかし、技術情報交換という面からみますと、世界的なドキュメンテーション活動の充実は、国内外の研究成果を洪水のように流入させ、“現在何が研究され、どのような成果が得られているか”は容易に入手できるようになつております。

このような現状で学会活動に期待されるものは、研究者、技術者に研究成果の発表と交流の場を提供する

だけでなく、技術の進歩、将来への見通しをお互いに考え、今後どうすべきか、どうあるべきかを討議する場所に育てることと思われまふ。

本号では、溶接材料、珪素鋼板、製鋼技術の流れと展望を掲載しました。参考にさせていただきたいと思ひます。

世界同時不況のなかで、鉄鋼業界をとりまく環境は厳しいものがありますが、不況の打開は研究と新技術からと期待されております。会員諸兄の活動が、国際的にも評価の高まつている“鉄と鋼”に反映し、ますます鉄鋼研究の中心報文誌に発展するよう、御協力をお願いいたします。
(H.A.)